

巻頭
言

曲学阿世



会長 山崎 學

安倍内閣から菅内閣に替わり、まだハネムーン期間なのに日本学術会議の新任会員候補6名の任命拒否問題で大騒動になっている。

片山杜秀氏によると学術会議の形が始まったのは明治12年で、西郷隆盛の弟であった西郷従道文部卿が西洋に倣って東京学士会院を作ったのが最初とされる。初代会長であった福沢諭吉は政府のひも付きを嫌い、脱会して交詢社を立ち上げ、残された院は体制寄りの学者達のサロンと化した。明治39年に帝国学士院と改組されたが、実態は変わらなかった。第1次世界大戦で飛行機、毒ガス、潜水艦といった新兵器の登場で軍事研究の必要性に迫られ、大正9年に文部省は学術研究会議を新たに発足する。

第2次大戦後、軍事研究に関わった学術研究会議はGHQによって解体され、昭和21年に軍事研究を排除し反省するといった共産党の強い影響を受けた民主主義科学者協会（民科）が設立された。こうした中で昭和24年にGHQ色の強い日本学術会議が発足する。昭和25年4月、日本学術会議は総会において政府が主導していた単独講和に反対し全面講和を決議し、激怒した吉田茂総理は議論を主導した南原繁東大総長を「曲学阿世の徒」と痛罵した。さらにこの年に学術会議は吉田茂総理、両院議長に対して天皇制を否定するかのごとく「元号廃止・西暦採用について」の申し入れを行っている。

昭和28年、吉田茂は日本学術会議民営化検討を指示したが、吉田内閣が倒れて実現しなかった。その後も日本学術会議は共産党シンパが牛耳る中で学術団体というより政府に反対する「政治団体」の様相を呈するようになった。日本が文化立国から産業立国に舵を切ると、日本政府は昭和31年に科学技術庁を設立し、昭和34年に科学技術会議を設置する。

我が国の学者87万人の内の2千人の推薦で選ばれた特別国家公務員210人の会員、専従職員50人、総額予算約10億5千万円（令和2年度）の日本学術会議は歴代の政権が手を付けなかった伏魔殿である。税金を使った公務員待遇であるのに、任命権者に対して任命拒否理由を開示しろと開き直る傲慢さは学者の世界では通用する論法かもしれないが、浮世では通用しない理屈である。人に説明を求めるのならば、まず前から指摘されている日本学術会議会員推薦の不透明性についてこの際ははっきりと説明するべきである。

今回の騒動では、問題の本質を理解しないまま囃し立てる一部のジャーナリズム、コメンテーター、一国の総理大臣を辱める戯けた知事と、役者に事欠かない。今回の事案がなぜ「学問の自由、独立を侵害する暴挙」につながるのか筋道を立てて説明してもらいたいものである。ついでに軍事研究に関して協力しないと宣言しながら、中国の「千人計画」に参加し、結果として中国の軍事研究に協力している自己矛盾についても分かりやすく説明してほしい。

曲学阿世の徒に 喝，喝，喝